

《短報》

卵から成体まで飼育し放流されたカブトガニの自然下繁殖

久志本鉄平<sup>1)</sup>・原田直宏<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 下関市立しものせき水族館. 〒750-0036 下関市あるかまぼと6番1号

<sup>2)</sup> 山口カブトガニ研究懇話会. 〒757-0002 山陽小野田市大字郡3135番地

はじめに

カブトガニ (*Tachypleus tridentatus*) は、干潮時干潟の出来る内湾を主な生活の場とするが、干潟の周りには砂浜があり、さらにその奥には内陸から流れ込む川の河口があるという共通の生息環境がある (関口 1998)。カブトガニはかつて瀬戸内海沿岸や九州北部に数多く生息したと考えられているが、埋め立てなどの沿岸環境の変化により生息数が減少した。1928年には岡山県笠岡市生江浜が「カブトガニの繁殖地」として国の天然記念物に、愛媛県西条市加茂川から東予市河原津にかけての一带が「カブトガニの生息地」として1949年に県の天然記念物に、伊万里市多々良海岸周辺が「カブトガニ繁殖地」として1986年に市の天然記念物に指定された。このように各地で天然記念物に指定されてきたにもかかわらず、瀬戸内海の天然記念物指定地を含む生息地は干拓や開発により海岸線の多くが埋め立てられ生息数は激減している (関口 1999)。その結果、現在環境省レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅰ類に指定されるとともに岡山県、広島県、山口県、愛媛県、福岡県、長崎県、大分県のレッドデータブックにおいても絶滅危惧Ⅰ類に指定され、保護対策の重要性が高い。

筆者の一人である原田は2001年に自然下で採取した卵から飼育した9個体を2011年9月11日(オス6個体)及び2012年10月7日(オス2個体メス1個体)に下関市千鳥浜の王喜海岸より標識を着け、海に放流した。知る限りでは、飼育下において卵から成体までの飼育に成功した例は、原田が飼育した2001年産(本稿の個体を含む)と1992年産の成功例を除いては、笠岡市のカブトガニ博物館のメス1個体のみであり、自然下には放流されていない。したがって、成体まで育てたカブトガニが海に定着できるかはこれまで知られておらず、さらに繁殖に参加したという事例はない。

本稿では卵から成体まで飼育下で育てた個体の自然下での繁殖行動を確認することができたので報告する。

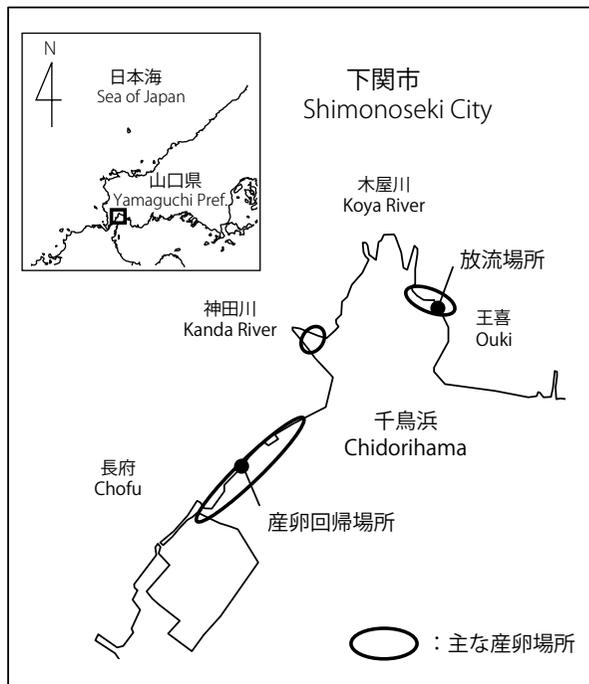


図1. 千鳥ヶ浜

観察記録

山口県下関市亀浜町(千鳥浜)にて2014年7月13日から7月30日までの期間にのべ14回実施した産卵

調査において、2014年7月15日0:09頃（長府：満潮時刻7月14日22:47 潮位414cm 潮位及び満潮時刻については気象庁の潮位予測を参考）及び10:53頃（長府：満潮時刻7月15日10:42 潮位382cm）に「Shimo.005」の標識を付けた2011年放流個体（オス）の産卵行動を確認した（図2）。なお、7月15日0:09に確認した個体では標識部分が撮影できていないが、体表についたフジツボの位置より標識を着付けた個体と同一個体と判断した。両日ともメスとつがいとなり産卵行動を行っていた。



図2. つがいで繁殖行動を行う Shimo.005  
1-2. 標識個体と同一個体と判断した根拠のフジツボ；3. 繁殖行動を行う標識個体；4. 標識。

#### おわりに

今回は産卵した卵を回収し、受精卵であるかの確認は行っていないが、卵から成熟するまで育てた別の飼育個体では水槽内で産卵し受精卵を得ることができている。したがって、Shimo.005のペアも受精卵を産んでいる可能性は高い。飼育下で成熟まで育った個体が自然下で生き残り、さらに繁殖に参加できたことは今後の保全に向けて重要な意味をもつ。しかしながら、もっとも重要なことはカブトガニが産卵できる砂浜、幼生が育つことができる砂泥質干潟とその沖合の浅海域など生息環境だといえる。今後も長期的に産卵状況や幼生調査を継続し、現状を把握していくことが保全を考えるうえで大切である。

#### 引用文献

- 関口晃一 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック（水産庁編）, pp.358-359. (社) 日本水産資源保護協会, 東京.
- 関口晃一編 1999. カブトガニの生物学【増補版】. 制作同人社, 東京.